日本古代文学史 改稿版

西郷信綱著

日本古代文学史 改稿版

西郷信綱著

岩波全書 149

西郷信綱

1916年大分県に生まれる.
1939年東京大学文学部国文科卒業,
日本文学を専攻.
法政大学講師.
著書:「国学の批判」「万葉私記」
「詩の発生」

日本古代文学史 改稿版　　岩波全書 149

1963年4月10日　第1刷発行 ©
1978年2月10日　第15刷発行

¥1000

著　者　西郷信綱

発行者　岩波雄二郎

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・精興社　製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

はしがき

この「改稿版」は、旧著に手を入れたいわゆる修正版ではなく、新規に書きかえたものである。そして当然ここに旧著は放棄される。それも、勉強したところほど変貌し、怠けた部分がいささか旧態をとどめる仕儀になった。今後、勉強をせいぜい自分に課するほかない。

枠組も旧と同じでなく、「結語」を削りおとし、あらたに「前史」「短歌の来歴」「女房社会」「王朝和歌」などの諸節を書き加えた。その他にも若干の組みかえや変更がある。また、各節の註記を廃し、年表を簡にし、文献解説にかえるに参考書目を以てした。少しでも本文に頁をさきたかったからである。

わたしは非常に多くの人の著書から恩恵をうけており、参考書目にあげたのも、ごく身近かな一部にすぎない。くわしい書目を知るには、たとえば本全書の『日本文学研究必携　古典篇』などが役だつかと思う。陰に陽にこの仕事を助けてくれた同学・異学の諸氏にここで感謝しておきたい。改稿の機会を与えてくれた岩波書店、また校正や索引つくりという面倒な仕事をひきうけてくれた阪下圭八氏に心から感謝したい。

一九六二年八月

著　者

目　次

序……一
古典とは何か――古代文学の特殊性――文学形態の意味――時代区分
第一章　神話と叙事詩の時代……九
一　前　史……九
一つの仮説――仮面の問題――成年式・季節祭――魔術の意味
二　英雄時代……一九
英雄と豊饒霊――英雄時代とは何か――久米歌――英雄時代の類型――その終焉
三　古　事　記……二九
内乱と王権――天武朝――神話と祭式――天の岩屋戸、スサノオノミコト――天孫降臨、大嘗祭――大国主命――神代とは何か――神

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

武天皇――倭建命――雄略、仁徳天皇――聖婚と歌
四　日本紀、祝詞、風土記……四九
記紀の比較――祈年祭祝詞――大祓――国引き――歌垣
五　記紀歌謡……五九
詩と音楽と踊り――八千矛の神の歌――歌謡、饗宴、祭式
第二章　抒情詩の時代……七一
一　抒情詩の発生……七一
記紀歌謡から万葉へ――抒情詩の母胎――叙事詩と抒情詩
二　万葉集……七六
舒明、天智、天武天皇――初期万葉の特色――柿本人麿――宮廷詩人――詩法の変化――山上憶良――貧の観念――憶良と旅人の対立――山部赤人――大伴家持――家持と万葉集――東歌、防人歌――万葉における歌謡の位置
三　大陸文化と日本文化――懐風藻から古今集まで……一二四

大陸文化の意味――文明と野蛮――大陸文化と叙事詩・抒情詩――漢詩文の全盛――仮名文字の発明――六歌仙時代――古今集の特色――やまとうたの成立

四　短歌の来歴……二三四

日本古代詩の音型――短歌と片歌――長歌の挫折――短歌の超群

第三章　物語文学の時代……一四三

一　散文の成立……一四三

古代世界の危機――貴族と官僚――余計者としての知識人――浄土教――詩と散文――都市――古今集序――土佐日記と貫之

二　初期の物語……一五七

神話と物語――竹取物語――歌と物語――伊勢物語――好き者――平中物語

三　女房社会……一七二

物語文学の特殊性――摂関制――後宮――受領の娘――女の歴史――女と文学

四　女流日記……一八三
かげろふ日記——紫式部日記——和泉式部日記
五　枕草子……一九七
清少納言と「をかし」——枕草子の形式——その美意識——自然観
六　宇津保物語……二〇九
長篇の成立——三春高基——政治の発見——落窪物語
七　源氏物語……二三
「私」としての宮廷生活——光源氏と藤壺——継母と息子の関係——雨夜の品定め——空蟬、夕顔、末摘花——紫上、女三宮——浮舟——紫式部の散文精神
八　末期の物語……二四一
堤中納言物語——更級日記の作者——栄華物語——大鏡
九　歌謡……二四九
神楽歌と大嘗祭——催馬楽——詩と音楽の分離——風俗歌——民間

芸能者――梁塵秘抄
十　説話文学……二六四
説話と説経――今昔物語の世界――盗賊、受領、武士――和漢混淆文
十一　王朝和歌……二七四
曾根好忠――和泉式部――西行――俊成――定家
参考書目……二八九
年　表……二九五
索　引

序

石器が鉄器に、馬車が自動車にかわっていくようには文学がかわっていかない事実は、誰しもよく知っている。自動車が発達すれば馬車は滅び、鉄器がひろまれば石器は用済みになる。こうして技術や物質生産の世界では、古いものは次第に、あるいはどしどし廃物となり、博物館に放りこまれてしまう。が、文学は必ずしもそうでない。むろん文学にも、それに似た淘汰がまるでないわけではなく、また技術の発達ということもあるのであって、たとえば『万葉集』と『新古今集』の歌をくらべてみれば、前者にない新規の表現技法が後者に発達してきているのがわかる。技法のこういう発達は、かなり厳密に科学的に確定できる、文学史におけるほとんど唯一の要素といえるかもしれない。ところが文学では技術はたんに新しい可能性を約束するのみで、それを目安に作品の位置を決めるわけにいかない。

何が新しく何が古いかは、文学上、かなり厄介な問題ということになる。漱石の小説の方をある種の現代小説よりかえって新しいと考えたにしても時勢おくれであるわけではないし、『万葉集』をそのごの歌よりいいと感じたからといって全く逆だちであるわけではない。遠くて近いのは男女の仲とか地獄とかだけではないらしい。明治の話だが、正岡子規は遠い万葉の歌を一気にたぐりよせて短歌革新を成就した。文学において古典という奇妙なものの成立してくる根拠が、このへんにかくれているようだ。

ある時代の文学は、それ以前の文学のもっていたもろもろの機能や要素をすべて包みこみ綜合しながら出てくるのではなく、むしろ、あるものを失うことによってあるものが得られるという歴史的矛盾がそこにはあると見える。だから古代から近代へと失われていく何ものかがあり、同時に、失うことによって獲得される何ものかがあるというわけで、古い作品がわれわれに魅力を与えるのも、われわれの手持ちでない、だが持ちたいと欲する新しい何かが、時としてそこに発現していると感ずるからにちがいない。

よく古典の永遠性ということがいわれる。が、それのしかける陥穽におちこんではなるまい。かりにある作がずっとよまれつづけてきたにせよ、享受の中味は時代で変ってきているはずで、またそれはこれからさき必ず変って行くだろう。しかも、どう変っていくかを目測できない。われわれの現にありがたがっている作がよまれなくなることだってないとはいえず、思いがけぬ作が浮びあがってくることもありうる。戦前戦後をふりかえってみても、その間あるものが死に、あるものがよみがえってきたのを見とどけることができる。われわれじしん、この絶え間ない変化のなかにいるのであって、自己の位置を絶対化することは自己を凍結させることになりかねない。年少時の文学経験について羞恥を抱かぬ人がいるだろうか。何をどのように古典として設定するか、つまりその選択と解釈は、かくして時代によって変容をうける。われわれはもう宣長と同じようには『古事記』や『源氏物語』をよまぬだろうし、真淵や子規と同じように『万葉集』をよむこともしないだろう。研究がすすみ新事実を知ったためだけでない。それもむろんある。が、それのみと考えるのは学者の思いあがりで、いっそう根本的には時代

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

の文学経験や文学概念が、宣長や子規などの時代と異なる性質のものになっているためである。

誰がどのように作品をよむかということをはなれて作品そのものの永遠性を論ずると、どうしても形而上学を作りあげる仕儀になる。作品そのものというようなものはどこにも存在しないし、誰にも経験できないだろう。では、古典と呼ばれるものはどこにあるかといえば、それは過去と現代のあいだ、つまり過去にぞくするとともに現代にもぞくするというほかない。日附がいかに古かろうと、文学として訴えてこなければそれは古記録で、現代人に対話をよびかけてくる力をもったもののみが古典であり、そしてこの過去と現代に同時にぞくするものを、歴史的継起の秩序における一つの特殊な人間活動としてとらえようとするのが文学史の役目ということになるだろう。

ところで斎藤茂吉は『柿本人麿』のなかで、自分は何としても人麿の偉さに及びがたいという歎声めいたことばを発し、真淵は『歌意考』でやはり万葉にかんし、「あはれ、あはれ、上つ代には、人の心ひたぶるに直くなん有りける」と憧憬の念をのべ、人間が「設けず、作らず、誣ひず、教へず、天地に適ひて」生きた一つの理想時代をそこに見てとろうとしている。

どの時代の文学にも、他の時代の文学でおきかえのきかぬ本領のようなものがあるのだが、なかでも古代の文学は特殊性をもっているといえる。それは古代が、無階級社会の母胎から出てきた最初の階級社会であり、文字をもつに至った人間の作った最初の文明社会であり、はじめて文学が文学になった時代であることから来る。『万葉集』が日本詩歌史の上でしめてきた独特な位置も、本文でくわしくいう

が、それが共同体的な歌謡を基礎につくられた個性的な抒情詩であるという事実を外しては説明できまい。しかもこれは、民族の歴史で二度と経験できぬ一回きりの段階であった。脳病院のかたすみで茂吉が人麿にはかなわぬと歎ずるゆえんである。詩的生産にかんするかぎり、時のめぐみがまるでちがっていた。万葉を規範として意識し、それにもどることが自己更新であるようなつきあいかたが、ここに生れてくる。歌よみであると否とを問わず、これは日本古代の古典の一つの代表的な享受法であったといえる。そしてもとをただせば、それは真淵ら江戸の国学者に達する。国学が古代復帰をめざす文学運動であったことは、すでによく知られている。

これをいわゆる日本的現象にすぎぬと片づけるのは浅はかで、この背進のなかにひそむ否定エネルギーを見ないならば、話はかんたんになりすぎよう。文芸復興（ルネッサンス）をはじめ、古代発見が否定エネルギーとして作用した外国の諸例におもいおよぶのも無駄ではあるまい。問題は、なぜ近代のある時期におけるある種の文学運動が古代を想起せざるをえなかったか、あるいは古代を一つの規範としそこにもどろうとする奇妙な形をとらざるをえなかったかにある。この逆説は、古代と近代の双方の特殊性にまたがる理論上の難問で、わたしにはうまく答える自信がない。ただ、古典ということばを口ばしるからには、これに挨拶ぐらいはしなければなるまいと思っただけである。

それにしても、この逆説がわが国ではかなり高価なものについたのは疑えない。周知のごとく日本国家主義はかつて『古事記』とか『万葉集』とかを現代化し、国家の神話を作りあげようと狂奔したが、それも実はこの逆説に大いに便乗していたわけで、いわゆるイデオロギー批判のみでは国家主義の根を

切断できないのもこのためである。げんに、この同じ根からいろんな雑草がはえ茂ってきているのではないかと思う。ここにわれわれは、事実認識の問題として、古代文学の有力な場であった日本の宮廷とか王権とかいうものにどうしてもつきあたらざるをえなくなる。それをよけて通ったら、古代の古典は、前とはちがう意味あいにおいてではあるが、やはり不当に現代化されるだろう。なぜ不当にかといえば、作品が過去にぞくするものであるゆえんを不当に軽く見すぎたことになるからである。

考えてみるに、自国の古代の古典とわれわれほど因縁あさからぬ国民も少いのではあるまいか。それも、ならしていえるほど単純ではむろんないのだが、とにかく異民族の野蛮な侵入によって文化が中断されるような目にあわず、一つの民族としての同質性を保ちながら原始以来この列島上で近代まで独特な発展をしてきた典型的な農業民族の歴史。その良し悪しを天降りに論ずれば、さかしらに終るだけであろう。だが歴史上の事実の問題として、それが稀有の例にぞくしており、またそのことが文化や心性や美意識をいかに規定し特徴づけているかは、もっと考えてみる必要がある。西欧人が古典というのはおもにギリシャ・ラテンのものであり、その間に日本にみられるような民族的連続はなく、民族の古典が初まるのはせいぜい『平家物語』に相当するものあたりからで、つまりわれわれのいう古代文学の領域をほとんど欠いている。そこに生ずる因縁のちがいを無視できない。その点、中国の文化は日本よりはるかに悠遠で、明治以前までは中国の典籍が日本人の古典の有力な部分をしめていさえしたわけだが、王朝の烈しい交替や異族の政権を経験している中国には、やはり日本と同日にかたれないものがある。強い影響をうけたにもかかわらず、日本文学の特殊性がいかにつらぬかれたかについて、わたしは及ば

ずながら本文のなかでふれるところがあった。

古代の古典が日本では王権の連続性とくっつき、その後光によってありがた味が教説されたのも、こうみてくるとさほど不思議でない。それを国家主義の政治的作為とするのはむしろ買いかぶりで、かりに作為であるにしてもその下地にはもっと自然的な心情がよこたわっていたはずである。連続性は、文化の秩序を維持する反面、しばしば自然に近づく。そしてあらゆるものを永遠という霧のなかにもやもやと溶かしこむ。さる高名な歴史家が、宮廷は日本の自然であるとかたったことばが思い出される。過去との心情的な同化、即自性の天国がここにできあがってくるわけで、真淵も茂吉もこの天国のなかで万葉とつきあっているといえる。わたしじしん、この古代日本というやつにまきこまれている人間の一人であるから、自慢にはならぬが、そのへんのことが多少ともよくわかるつもりである。

だが、いくら連続性がつよいからといって、古代人の世界が即自的に、つまりたんなる心情や肉眼で見えるはずがない。見えるように思うのは、心情や肉眼で見える部分しか見ていないからで、茂吉の人麿像にも多分に自己投射があり、どこまで古代人をつかまえているか疑わしい。国学者の考えた「上つ代」の影像も、もうすっかり色あせてきている。古代人とは何かという問題に、文学史もそれなりにこたえるところがなくてはなるまい。

ここで本書の構成ともかかわる文学形態(ジャンル)のことを少し考えておこう。さきには技術と文学における新しさの観念のちがいにふれたが、これは社会の発展というものが一筋縄でいかぬ矛盾を内蔵

していることを暗に示すものである。歌謡を土台にした抒情詩としての万葉のもつ歴史的一回性についても一言したが、神話をとりあげてみれば、このへんの消息はもっとはっきりする。自然を魔術的に克服しようとして生れた神話というこの幻想の形式は、自然と人間のあいだの、まだ文明化しない或る特定の関係を土台にしているのであり、この土台が社会の発展によってくずれるとともにこの形式は消えて行く。少くとも他のものに変質する。くわしいことは本文にあずける。ところが一方、古代人は、われわれに一等縁のふかい文学である小説というものをまだ知らなかった。小説を可能にする歴史の前提が古代人――というとき、わたしは平安時代をふくめないのだが――の生活には欠けていた。つまり近代人は神話を失うことによって小説を知り、古代人は小説を知らぬことにおいて神話を知っていたわけである。文学史において叙事詩とか神話とか抒情詩とか劇とか小説とかいういくつかの形態が、全円的に一斉に成長し開花するというかたちをとらずに、あるものは早く、あるものはおそく出現し、また時期によりあるものは向上し、あるものは下降するというすすみかたになるわけは、社会発展の蔵するこの矛盾をぬきにしては考えられない。

これはしかしまた、めいめいの形態が固有な機能をもっていることをも意味するだろう。だから抒情詩をよむように小説を、あるいは小説をよむように神話をよむと、将棋盤の上で碁をうつような結果になりかねない。『源氏物語』が抒情詩風に、『古事記』が小説風に何としばしばよまれてきたことか。このへんにも、たんなる心情や肉眼をこえた問題がよこたわっている。といって、それをたんに論理的なものと考えるべきでない。文学形態は、歴史の内部ではたらき、歴史とともにうごくところの文学活動

の形式である。この歴史的運動にかかわらぬ静の形態分類学は、実際の役にたたない。固有の機能も固定してはいず、活動と変化の幅が見こまれる。とくに天才はそれをしばしば拡大し更新するであろう。諸形態のあいだが線のごときものでしきられているわけでもなく、混淆する例も少くなく、またある時代にどれかが主導的であるからといって他のものがみな滅んだり用済みとなるとはかぎらず、むしろその間に緊張と対抗の関係があらたに課されて行くのが普通で、つまり現象は複雑で多様である。

だがそういう多様性も、諸形態がめいめい異なる機能を内在させていることを前提としてのみ意味をもつ。さもなければ、文学が歴史の条件とかみあって展開する軌跡は、多様性という雑炊の海に溺れてしまう。そしてこれは、小説というものをまだ知らぬ世界に生きていた古代人たちと今からつきあおうとするわれわれにとって好ましいことではない。本書で日本古代文学史を、第一章神話と叙事詩の時代、第二章抒情詩の時代、第三章物語文学の時代という風にわけたのも、この独自な軌跡をたどりたかったからである。結局、土居光知氏の『文学序説』の驥尾に附した恰好になるが、わたしなりにかいたつもりでいる。もとより異論は予想されるけれども、この方が大和時代・奈良時代・平安時代という分けかたや、上代・上古・中古といった分けかたよりは、動的展開をとらえるのに役だつ点では、いささかましではないかと思う。もっとも、分けかたそのものにこだわる気はあまりない。大事なのは、また困難なのは、諸形態がそれぞれ異なる時期に発生するその過程と意味、また相互のつながりや対抗関係、これらを一貫的に、認識すること、いいかえれば、古代文学史を個々の作品のよせ集めとしてではなく全体として認識することにかかっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor